和哥言選作法

第　　號
函
冊
藥師寺文庫

特別
へ4
8149

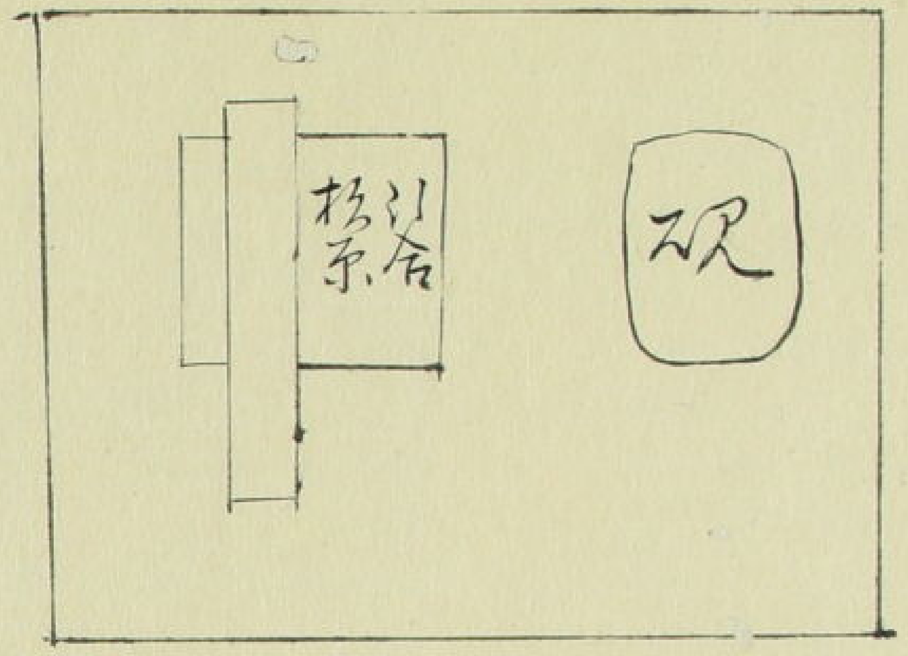
和歌會席作法

一 會所之體
本尊ハ住吉乃名號又ハ人丸の畫像也其前ニ花瓶を立置其前ニ香爐を置へし又ハ玉津嶋の名號をもて飾

一 押板の本尊の左の脇ニ文臺を置くへし其うへに硯ニ一合杉原一帖を置へし其杉原のうへに短冊を置へし當座と兼日乃歌とも以て書用也又當座の題をハ兼日より歌者へつかハして出たるもよし

貴
へ4
8149

押板の上ニハ文臺ニ硯引合
杉原なと置へし



一 会興行の時ハ右仕候者を一人宛て詰させ其人数揃ひ候の時役者立て押板の文臺の上の硯懐紙を押板におろし、執筆をハ押板の前計に置て退出し、其後懐紙を置べし

一 懐紙の置様 執筆座に着より、立て置べし。下座の者ハ文臺の脇又ハ下へ入ても置べし。次第に上座の人立て一座も連衆を文臺の上に置也。文臺の右の張より置初候して其座やう先客左にして左の袖に入たる懐紙をとり取出して再さへく又袖に入て一礼して立て右の方へまハりて文臺の方へ向て両膝をつきてさてかしこまりて宗匠の右の方の膝を折て一方を足ふまへて両の手をそへて左の袖の懐紙を取出して左の手にて文臺の上に置て宗匠の方へ身をひらき両の手をつき礼して

執よ入りて本座に着座すへし　ぬ氏次第は
上へ合せへし　其後上座宗匠の前には座をも不立
立て出合ひ出て（たの座）ものつき左のひみて膝すゝみ文
臺の上に懐紙を置て座に着き其上懐紙の
在さやう随分の古実之て秘之

一　読師は上座の人の役也　執筆は宗匠家の人の役也
り　家の人多くは執筆の人するなり
上座に執筆せし人なくは下座なる人も故実
の人すへき役也　又講師は若輩の人の志を
発足の人にかすへし

一　懐紙済て後　役者出て押板の上の短冊を
取て宗匠の前へ置　執筆宗匠両座の懐紙を出し
文台を以て取て　三つに折て又一枚にて折て
左の手へ入しと書けるを右に抜手にもちて
祝乃ふしに合て探らすへし　其後よろしく上より次第
に読を取へし　読みは明題集をつんで出家の人を
それまでに渡すの也

一　ぬ氏読を出て後巻物を取て一枚つゝに並て家々の人
のよむ也　是も時宜によるへし　又上座の人々
人々もちの読人なとにゆかすへし　ことにすれは
巻物をも返して清書せてよき時は唯文入ても

探すへし一巡さして猶あまる短冊人を八人中の
短冊をえらんて二首三首もよませすへし
一 当座の会短冊人まて八なくて若人数に而は
兼日より短冊人を題をさして題の次第を官位の
よりわけて分り作らへし 又巻物軸を上流
まして中をと探るともあり
一 後者短冊をとりもち候て当座のまへに当くへ
すして硯の蓋に入て左座の手中におかす意に
尽て礼をして一枚つつ短冊人をとりて退也共
それぞれ手中に出て両膝をつき右左の手をつき

左の手にてとりて右の手へわたして懐中して退也

押板	文臺	ダンサク	硯蓋

左座の手中に置き硯蓋短冊入置へし

一 会席にて平人ならは各よも作者の歌を吟すへからず左
座を始て立入へからず傍なる人とかはりかはり吟す あるひは
何すへからず詠草さしく重ねて一二首清書かきく
するもあんなり きたる詠ありとも人先に詠草
をまず書出流詠草をとりて見合せ也

一 会の時懐紙又は短冊に書物なりは下座より立て一々近
又短冊人をよみて出て後硯蓋へ入るとき下座より上座より入

初心也

一 詠草の事 当座の詠草 杉原を一重折紙にして端
四寸ほと置て 題を書て 一行を二行にも書て 名を題より
下端に書て 宗匠へ持参して 宗匠より見すへし
又兼日の詠草をハ 只杉原を竪紙にして 二行に
書 題を端に書也 端ハ二寸置て 書 又野山以下
卒爾の会なとにハ 詠草なしに出へし 人の方より
見へし

一 当座 題人も渡て 出来の時ハ其体の切者立て懐
紙も題人も 大方に書て 宗匠の前に出す 并宗
匠 取て 懐紙をハ 房信に書て 題人をハ 題乃
次第に重て 下読師に出せハ 先其下に懐紙題人
をとらへて置て 懐紙ハ右 題人(たり)ハ前に置へし 兩本の
文台の上に置也

一 役者先 次第の事 先読師出て 文台の左のわきに
着座して 講師の座を呼出す 元ハ二人
今ハ二人計なるへし 其時やかて 披講も出て
着座して其後各同時に一人ツゝ着座へし

一 講師 披講の事 男ハ すわうの衣紋を 出家も
衣のえもんも 先文台の前に 足はなれるとま
こまり 居て 安座すへし 春日同詠ニ首和歌
と云なり 端作をよむ也 よみの仏たるへし ここに出るをよむ

やまとうたとよみおもてさらく名字をかくし歌を
よみて後名字をよみ捨て、又一首の和歌をた
春日同詠寄世祝和歌とあり紙春の日なりと
せられよみ、いそひといへるをよめる歌をうた、
ひとよみて名をよみ入をよむ也、出家なとハ
季乃字同の字に書それをは只世をよする祝を
つらねる事をよめるとよむ也、勿論歌をよむ人ハ
初けりこ趣て法師も歌共の目つかひを見て好る
ままつ一の施字や、り出家號乃人の名字宗匠
同前ひあれも二及も三及もよむへし、御鬮ハ七及共
よむとふく出家號の人とあらふとも歌共の同法のひ

なとふくハ子細あるとありとおもひて一及みてつきに、
猶有口傳
一つ殿乃上官の人ハ名字ハ出家なりとも在家なると云も
法名家名をよまぬ也、つるの位等ならハ在名をよそ
院主ならハ院号めけて仕又在家の人を実名ハ
在とい実名をよむへし、又叙とい実名もよれも
人によりて位下ならへし、又各遊ある人ハ各遊計
よむもあり、又武家の夫ハ一殿の上位な家なと夫
名たまりて書をかまそこの讀又ハ名高井限、冷泉殿など
やまけりつ讀定出家號也共位をもちひて讀、
出又當或等御の来り、出の上下あつ徒の人をハ実名計

名を讀ハ常の事也。常にも書様にハ名をかし、懐紙ハ違へ
一 詠人をハ顕をよみて実名を讀ハ、後にて懐紙なとにて讀名を
よミやう候ハゝ、かならすへし。懐紙同事也
一 講師児の懐紙詠人をよむに、名を松寿代丸とも懐紙
一段の書様の人なとハ、松寿代丸なとよむへし。又さて
書様も無官の児なとハ、松寿代とちやうよみて、丸の字
にて候故にて児の名を何々丸と云字に書也
多くあり。出入多し。公家之家々の子息なとハ出て
一段之にや武家以下ハ出家まて也。事の字同の字をハ
児ハ一向に書也。只詠三首和歌とちやう書さうへき
児なとて懐紙出ハ必書名すへし。書様也

一 女の懐紙をハ薄紙にて、さて切ちらしをちらし書
て書上を引合にて包て、懐紙の上に書なり。又右
あらは又同しの時も引合を二(弐)枚重ねて切ちらしを
書之、是もよろしとも包て懐紙のうへに付
一 一首の和歌も、三首のも、端作をよむハ始の一枚
の事也。二枚よりハ名ハかりよむへし
一 出家の名に僧都覚栄とも、又ハ僧都覚栄なと書
よくある時も、覚栄僧都、又ハ覚栄僧都なるとよむ也
是も書様の人のる也。俗家ハ官実名とよむ也
法中ハ実名計をよむ也。是その相違也

一懐紙をたゝむ時三首をたゝませ玉ふやうなとあれとも
事ハ、主上の御懐紙計也、又ハ公方家の懐紙も
めてたくも也、其外ハ世上人々ハ飛鳥井殿冷泉殿、
なとの其流門弟の人々を集めての会乃時宗匠
流まつりひらくハ、参席の懐紙計たゝませ玉ふと
よむ事も見えさへ自然の稀なる也、
一主上乃御懐紙をハ、書様に乗せてよむ也、其
外臣進るへし、主上の御前へ向けて置也、
又其の御懐紙をハよみ揚せしとのる也、
一卒会なる事ニ有てハ、あるて野外なと卒爾の会なとハ

講師の会をよみあくる時はしめの一首はかりハ手、句
をときてよみあくへしとて読師は座より小机を定めて
て中にいれて胸の通に読人を招きて懐紙を上座
置さのこ句ひきて、すへてよみあくへし、故実也、
一講師ハ会をよみあくる計也、懐紙を読人のまゝ風情も
おもふ事を出すへからす、読師にまかせてよむ也、
一発声の故実ものとも右の家の人の役也、出座に居
ゑて文台の脇に座るへし、講師よりよみあくるとき、一首
ほと披講すへし、甚次は甲乙とて下すへし、又ハ甲乙
三首めけ下すへし、三首めにて八左右へ也、又冷泉家に
甲乙よりも始玉ふ乙甲ニ三首乙ともおる也、当流ハ同

必甲と申ハ始也、是其曲の本調之、中に必甲

の人乃声を乙ニ而出し、甲ニ而出し、云事ニかけ

くに出て可也、調の一首も必甲ニ而発する也

一お稽古の人乃声を聞て、為に甲より出て発する

又ハ下る、よみ出して下るも可成や、

一懐紙を甲ニ而始て乙ニ而果して、其乙を弟人の

巻乃ふ志ほけて、其乃を乙ニ而詰めて、中程よ

甲ニあげて、云事るをして、又甲ニて果するよ

是ハ適宜ニ用するなり也、

一発声のふしの事、

△君が代の久しかるへきためしにハ

ハーーーへーーー かねてそうへし ハ川へ宮へへ 住吉の松 宮 末ハ同前

△君が代のひさし へーへーーへーーー かるへき

△きみが代の同 君が代の久し

△君が代のひさしかるへきためしにハ

かねてそうへしすみよしの松

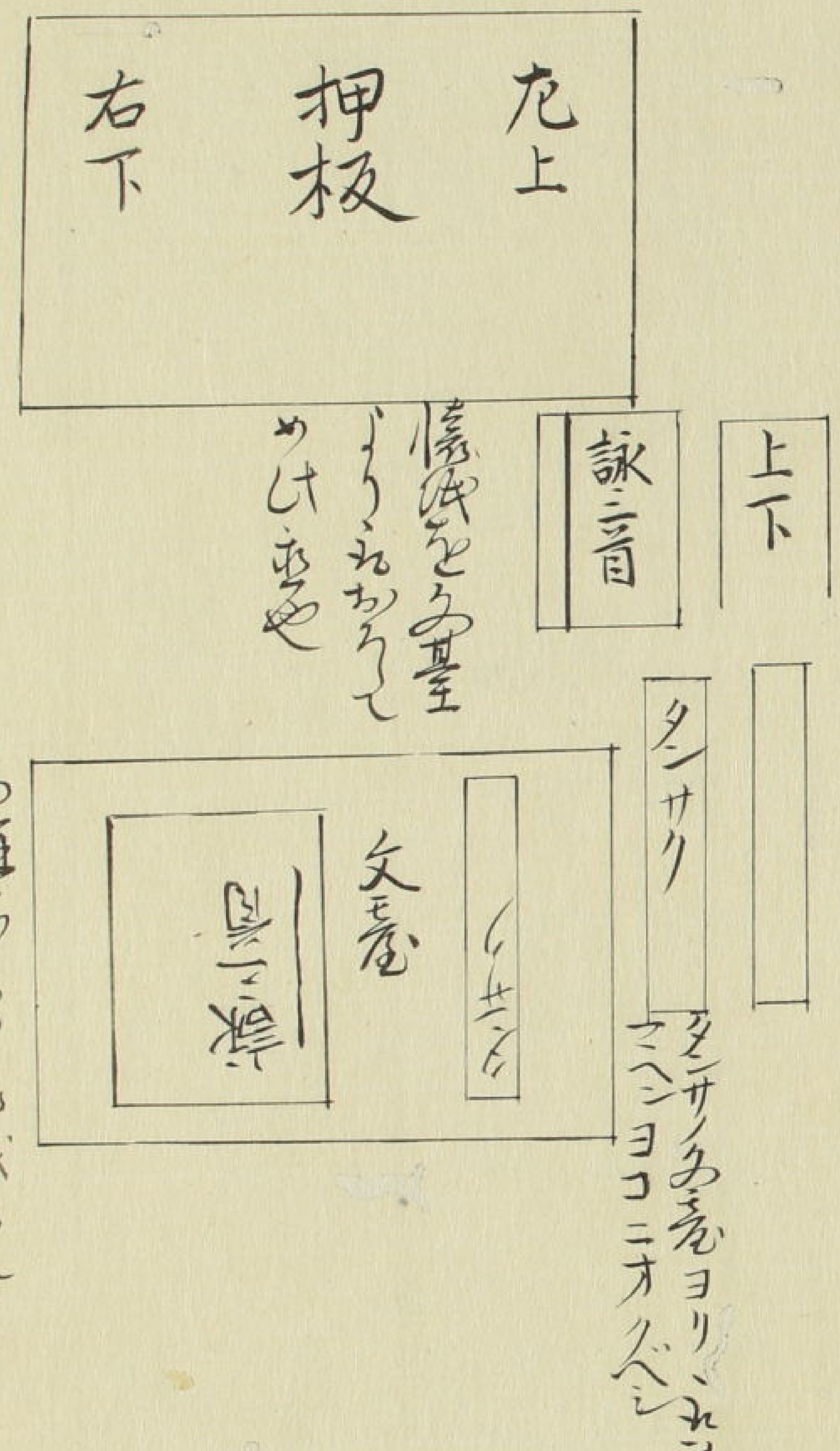
△君の代乃ひさし 同

△年のうひそり そう ハ同

君が代のひさし 末ハ前甲ニ同

△若ゝ代のひさしかるへき　未ハ乙ノ首
△若ゝ代のひさしは
△年乃うちに春来る日
此和歌も物ふしくまへし、又此門乙の三字ハ六合を本人もまた迎ひ来る時すへし、勝ハ声の入ぬ之常にすへからす
一甲乙三字を我る五首の中ハ法れあても字あ毎り趣也、当用将はかりを併そすへし、されハ陣法にも露声乃ふさきとよく〳〵心つくろひてすへき也
一軍陣の合戦出陣の門出ある時の合ハ乙の曲ハ一向すへからす、勝軍也甲三字甲ハ勇へしく〳〵てかく〳〵

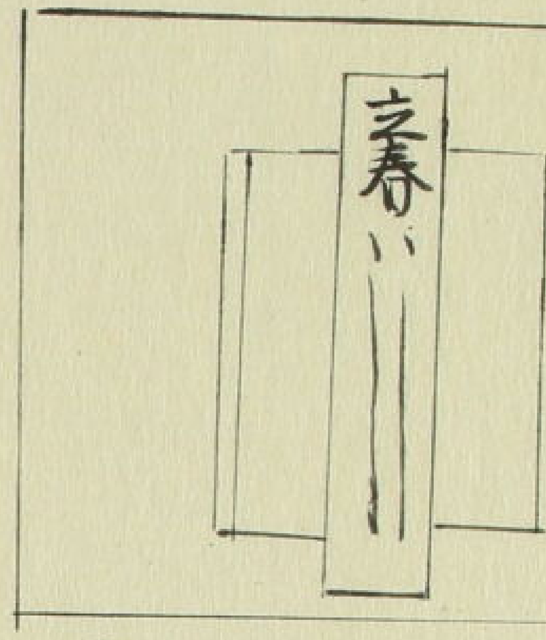
一甲の三字のうたハ一首も二首も乙の三字を交て、両こさおや当読の人によりてよし



めされて読師へ懐紙を二枚にて各々一度に出せし講師是をとり此時講師杖誦をする也、懐紙は講し終て読師へかへし懐

紙をとりて、右の膝の脇におろして、置たる懐紙をと
文台に置て、かへりて講師ともに発声を披講する也、
一座も同して すへし、是次も相伴也

文台



如此文台の上に置いたんさくをとりて講師ハ
本座に退く其時読師をも召て のちも第
錐小刀ハをも持出て寄附まさにする也
其間相伴
読師の座に上﨟と衣の人すへし、上座の左
座に着する也、御文台の上の懐紙たんさくを重ねたる懐紙
をとりて、袖すへて様に懐紙の方をとへかさねて二つにおりて 懐紙
をも右の膝の脇におし、ひさのうへかけて二つにおりてをくへし、
をもたんさくを一つのかさねより披て文台へ返しに講師に披講

をさすへし、懐紙を一枚ツヽ読師前二つにおりて、其
又右のひさの前におしかけて直に其後前なる懐紙をとり文台へ
置なる也、其後講師前いしのごとく披講を読上する
なをいしにおりて懐紙をハ読師前へ一枚ツヽくへすべし、
うへしたの手の指にてとりて文台よりかけて右の手の指
あるよう人すべし、武士なる又たんさくを披前へおろして置
しを二つにおりて読師を上にする也、文台の右へよて
置よて置こちよ前のたんさくを置よをりて置し
本座に退也、次も前の如くに心得へし
一披講のうち上座ハ高声にすへし、若座ハいかにも上座
の如し曲を守つくろいて、例とてあるへき品也、
一講師のよみ様の家々をあらハすとあるへてよみあくるべし

ありさまハさもありし又ハ発声のする也、余の人ハ其人々にして、
冷泉家にハすることなき也、

一 発声の歌をハ必かくへし 拾遺せんし先交らし、歌を手前より弁ぜる也、別の紙にハかへきなり、

一 懐紙ハ必しも合せるへし よく用ゆることにて 杉原紙又ハ奉書なとにてもされハ人も用ゆの
ことなりハ不苦、内裏様ハ大高檀紙の上下をきりて
用ひ申也、さて諸家なとハ大高檀紙を一尺二寸に
切りめて用ひ申也、但堂上家なとハ小高檀紙をも位に
てもあれ 出格也 武家出家なとも人によりて小高
たんしを用ゆ、一尺二寸あまりにつめて用ても
苦しからず、常にハ只引合を用て 雑なり、

一 首の懐紙ハ端作りに歌を書入て其ハ二行に書なり、

九十九こそにて書、但書切るやうなる時ハ、一字二字は
いかほどの御へ書をくしても くるしからず、事に二字ハ必
ハらりの二字ならぬ様にも、四字をも書ても苦、

一 飛鳥井殿親子兄弟のあるハ、一首の和歌を二行書すり
書事ならや、常の人なとハ三首の懐紙ハ何人にても、

一 首の和歌 題を必祝言の題をも用、但当座の歌
なとにも必す祝言をして読、月次もまへ必一首
なりとも、雑の歌を附とも書ていつも、

平韓謹言式條をも誰文字のみ也、

一 公家衆も上位の人ハ書ましいなき事同の字を書
たまひし人によるへし、法中 或見なとハ 雑の歌は書事なし

一 向季同の二字書へからす、

一 俗の姓名俗名季子の字計書時ハ官位名字を書へし、
又季同の二字を書時ハ官氏名字を不書、又季同の字
を書して官位名字書すハ我と同様の文字之儀也、
人ハ出家とも僧とも懐紙出ハ俗家ならハ季門の字可書、
出家ハ放を書り氏之尾書無之、

一 在家の入道ハ俗姓の氏を書なから法号の時ハ法諱某
書ハ法橋の法号無之、

一 諸但書札の字多く多し拾く元を記す、
ただしくハ師範を書へし、

一 一首和歌書様

上 春日同詠寄世祝 和歌　俗家様

中 春日詠寄世祝 和歌　同

前二行三字之九十九ミとて書と八法號の書様之、

下 詠寄道祝和歌 何某 沙中 僧名も

右出仕の日、俗家より出候時ハ當職の人なき時也
法中、兒、若衆ゟ出候時也

詠寄世祝和歌

權大僧都應祐

右ハ當職の時如此書之

權律師秋應祐

非職人の出候時如此書之

沙弥　名宗

但在家入道當職の出候時之

一　二首の懐紙如此

春日同詠二首和歌

官氏實名

題

右二行七字

題

右二行七字

一　三首和歌も右の如く前の二首の懐紙の季の字を書
氏實名前ニ同し心得て書へし端作り書様同しく又
寺社法ハ此の書様あるへく是を書へし

夏日侍日吉社寳前詠二首和歌

宮氏実名

題

題二行　七字

題

題二行　七字

是ハ何の社頭も法楽して　ある時の懐紙にかく

やう也　又人数ある時ハ夏日同と書へし　猶また

此社の名を端作に書へし　是れも明神に限

らす　二字三字　皆同し事也　同し

如此書て奉納するなり

秋日侍某寺佛閣詠

三首和歌

宮氏実名

題

題二行　七字

題

題二行　七字

題

題二行　七字

是ハ佛閣なとにて催して法楽にある時の端作也

寺の字を端作に書出す　又神前社法楽も同し

出家ハ只詠三首と計りなし。秋日とハかゝぬなれとも
当寺の名をハ下ス。

秋日陪大井川遊詠三首和歌

題

宮　実名

かゝり　七字

是ハ自分名所遊覧なとの此儀式ニあるなり。
所の名をハ端作ニ下ス。又ハ清水ニ於るとも下ス。
此時も此題字下之自分是ハ古額僧の人ニても
おほうろきなるもの也。又季ニ依を出して詠三首和歌とあるなり。

元日侍倭歌所詠

鶴馴砌和歌

宮氏実名

かゝり　三字

此和歌所と云ハ宗匠家ニ擬する事ニて要と号して
在時あるを也。其所ゟてハ一向出へからず。今ハ和歌所
ある此儀式をとりて宗匠家ニ於て其会あり。
其会ニ出る人なとり限りて詠る此式也。

三月三日翫桃花

和歌　官氏実名

分三り　三字

二首三首の時も端作ニ題を出入るなり　アラハ　会する

二月十五日之若者人出候ハ季同字可出

春日同詠翫桃花　和歌　官氏実名

三月三日と同じや

五月五日ゝ——

端午ゝ——

七月七日——

七夕ゝ——

八月十五夜——

九月九日——

一此端作大略の式也も自然之道相傳の人ニ時ニよる面白し。常ニハ只ハ季の字を出スよし。又法中ハ此端作ハ不用、僧も只ハ詠二首三首五首、七首ハ打ち計て出ス

一一首の懐紙を詠一首倭歌と書する也。是ハ

子細ありて一段の伝也、

一 経の巻物を懐紙にも用てもよき也

詠譬喩品和歌と書て二首めをハ略也経
文を題にしてよみて書也又懐紙のことく也

一 花下月前なとゝ書て当座に懐紙をハ略書とて、
書出の年号月日なとハ当座にハ不書、

十首

一 哥七首十首の懐紙の事、二三首まて書、
なと、五首ハ三行に二枚つきて三首めの字を
奥の紙へ出かゝる様に結ひし書也七首も二枚
奥の紙へ四首書也十首ハ二枚つきて書也いつれも

二行書也、十首ハ二十首よりハ一巻に懐紙にハ
三行書也十首ハ廿首になれハ紙数多く、書をハ二行に
書也四首まても同し、

一 懐紙書様ハ大高檀紙にても小高檀紙にても
し合にても人の位によりて用て、白紙両面写書て
懐紙を書也上一寸下一寸明へし、一首ハ三行に書也、
又題の書やうハ、題の書をハおしさぐ
やうにて書、雅号名字とかきて、続様にハ書かき
続て書てひらきて先を二寸もり折て袖の袖
懐へ入て右之方へ持事ハ文字家にハ尤くと書て

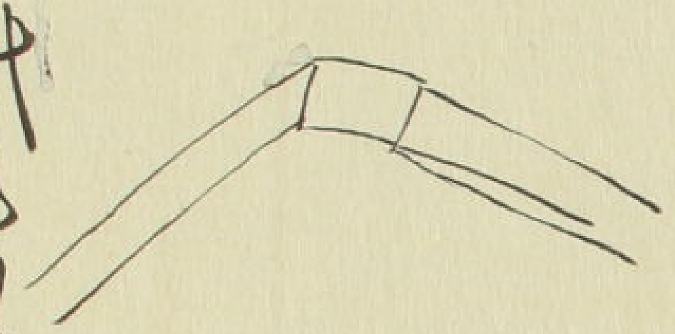
平めなり上座も、前もなる人の袖に入て持参すと

一 書出のやう月次の懐紙には年号月日の下に月次と
会として出詠者不知の会なるハ月次会なと云御
月次とハ、不定の寄合也、又左の月次そハなく、不定一
会興行の懐紙ハ、年号月日に会と計て出し
題人の書出ハ年号月日の下にかしこまりて書せて
出来と云也

一 懐紙ならぬ様ハ懐紙の裏を上の方とを能く
はさみて重ね候て二寸に折て其余を机の辺
をけすて小刀にて立きまりの間二寸ちりて通て

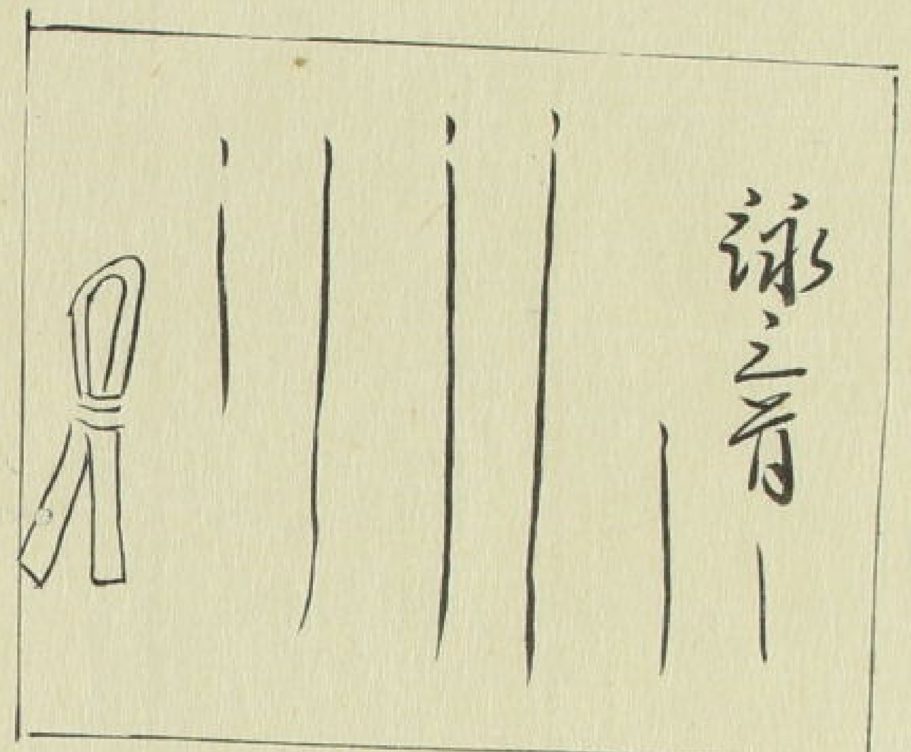
結ひて訓合を一寸あまり切て眞中たたみて、座の二寸
あまりありて下に懐紙をハ二つをむすひつきて
とるへし、すくなくハ只つるけて二つを結つくやう
重ねみたる二の紙をちしの折めと切めとをとり
ちらしてこよりにかし さし入て結つくへし

上



めはしのみめの威やうにむすひつくへしハ折めを上へ
なし切めを下へなるやうに結ひつくへし、あまりむすひめを懐

紙の表へなして茶のかゝみひもを通したる穴へのこり
より合て表より下にてむすひ、のこりを上へ
はさりを下へおるやうにむすひ、右の緒を掛て切



一懐紙のしたゝめハたくのむすひより四方へ出て穴を通
一懐紙を包てしたゝめ候ハヽ上の方又命の方も

包て後さ水引を通してしたゝめ候て上より後て
あはせ合てむすひ候也又公方様の方も結候也それハ
上をつまみ候也それハ後ろにする也
一懐紙の表書の事、袖の懐紙の表の端作の方より上を
一寸五分程のけて書、年始会、月次の
むまき初ハ月の下に会始と書也
一縁之人の幅ハ一寸八分、式ハ一分ヶ分未遣
ても名書
一縁之人ハ常にハ花押を上にあてて書之、人の遣
名字ハ花押を上にあてて出
一縁之人ハ名のかよく後さするへて編ミて上方

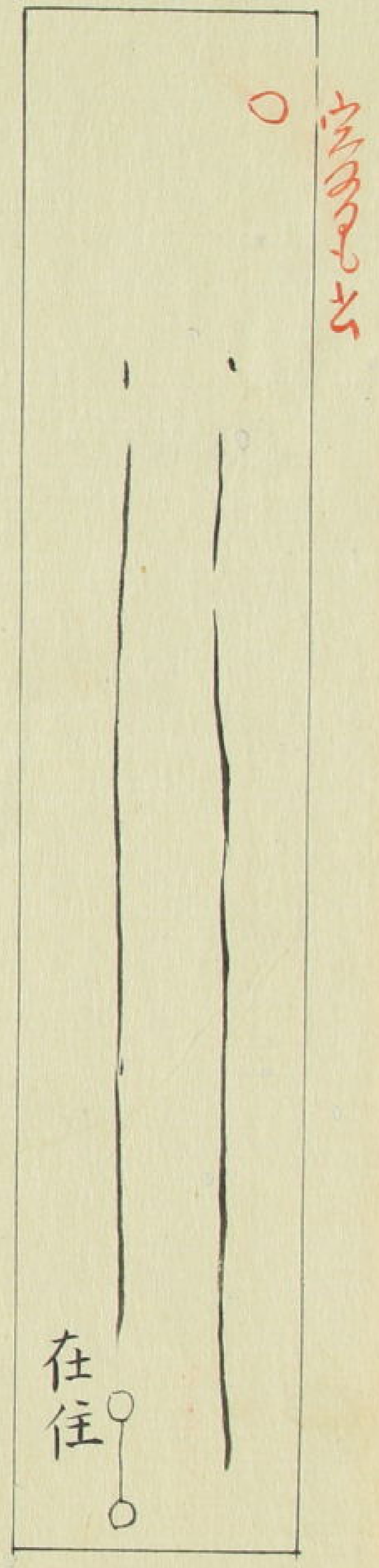
けり来て入念て穴をあけて水引二筋まて其あ
る也其始より二寸三分をへて二筋をひと所よ
むすひて短冊よくみするやうくしてんる様
とめへし水引の末をひとつにそろへて切末て
あまりし二寸計にして切本末水引のちかくハ
にきすく末をそろへて其文ハ様すてハ上下き水引
一筋也て其文の名ハ六筋に合るや

一 短冊人書出の格ハ長寸二分をとさて年号
月日書て前ハ名て其の脇よ当座としるす
或ハ神社法楽ニハ法楽とて出又兼ねり

法楽の一種ハ其社頭の名を書て法楽とて
出候当座ハ人数を集て読ともおほしる也
又追悼の一種ハ法名書て下ニ追悼とも出也又ハ東
一回追善とも或ハ百ケ日とも出也於文章多
時ハ其の端ニ二行に出也

二寸五分下ニ出
永正十年 何月何日 当座

聖廟法楽
於追悼



依嚴命任本書寫之訖

三井末葉郷

三井末葉とあれハ円満院殿之事ニハ
後土御門院御子 仁悟親王ゟ入木道伝へ

右之本聖門御筆之寫也
深て秘之一流之次聊誌之

幽斎

右之本者肥州熊本ニ有翁之書抜所
従泰勝寺寶蔵中出写之所也
假字遣落字等皆随本書写之則
泰勝寺住職含雲叟者老師風観
枝之門葉也因茲傳之訖此道之
至寳也之弐報可禁外見ニ己

寶永第三丙戌年 仲冬下浣
盈湘堂 長隣

這一帖幽齋翁珎蔵なりし
和哥之帰能書等の事
小堂なとに汚すかなとし
當家師説あかなふ拝へし
奥書なとくまく傳ふの郎よ

くちふみの二、

天明七年九月重陽於

病床かきし

源平祥

此中和哥校讎のところゝ平祥朱點のところ

保和沈

同八年二月ある日照校し

天明八年二月ある夜

平祥より恩借し本其哥

書写ひ納めおうつし畢

源守諒